

おばれだぬき



おばれだぬき

むかし、むかし。「おばれだぬき」とよばれているたいそうずるがしこいたぬきがいました。

西の山が、あかくそまるころになると、夕ぐれを知らせる山ぼとが、

「ステッコッココー。ステゾウシキ。」

と、鳴き出します。そのあとから、

「クレデ。クレデ。」

と鳴くふくろうの声も小さくなり、うす暗くなってくると、おばれだぬきが出てくるのです。

「オバレル。オバレル。」

といって、だれにでもついてくるので、しかたなくおんでやると、いつの間にか持っていたよめいりのごちそうを取られたとか、帰ろうとしないので、あま酒を飲ませたとか、たぬきにまんまとやられた話ばかりです。

みんなは、それがくやしくて、今にこらしめてやろうと思っていました。

りゆうというおじいさんも、その一人でした。

あれは、うら山が秋の色に変わりはじめたころでした。

「オバレル。オバレル。」

と、どこからか、たぬきの声がついてくるようです。りゅうじいの足に力はいりました。

「ようし。おんでやるぞ。」

りゅうじいの背中のかごが、ひよいと動いたかと思うと、ボタンとにぶい音がしました。

りゅうじいは、もう十日も、かごの中におなを入れて、この時を待っていたのです。首をはさまれたたぬきは、ぐったりとなりました。

「おばあ。たぬきをおんで来たぞよう。」

ほうつと、だいたい色に広がっているあかりに向かって、りゅうじいの声はずみました。

「どうれ、どれ。」

ぞうりをつっかけて、走り出たおばあは、りゅうじいのかごをかかえるようにしてのぞきこみました。

ひんやりとした土間でおなをはずしてもらったたぬきは、首をいやいやでもするようにふっていました。りゅうじいはこしをかがめながら、たぬきのかわいい顔をのぞきこみ、

「ええか、よおうきけ。おらたちでも、人様の物をだまって取ることは、いっとうわるいことじや。ええか、ここでさっぱりと心を入れかえてみよ。きつとみんなにかわいがってもらえるに

……。

これだけ話したのに、たぬきはまだ首を横にふっています。りゅうじいのまゆが、びりつと動きました。

「おばあ、松葉じや。」

と、どなるが早いか、大きな手でぐいつと、たぬきの四つ足をつかんで、外へ出ました。

たぬきは、松葉いぶしにされるのです。青松葉が、パチパチといぶり、けむりがたぬきをつつみました。

さすがのたぬきも、息苦しくなったのか、はじめてかなしそうな声を出しました。

「もうええに。ええに。」

おばあにいわれてりゅうじいもかわいそうになってきました。さつきから、お月様もこちらを見おられたようです。

「もう、人様をだましてはいかんぞ。ほうれ、お月様にも、「もうしません。」というて行け。」

と逃がしてやりました。

りゅうじいの口もとを、じっと見ていたたぬきは、よろよろと山へ帰って行きました。

木の葉がカサカサと落ちる夜のことでした。りゅうじいは、まっ暗な大やぶの道を通りかかり

ました。古いむくの木の下まで来た時です。目の前が急に明るくなりました。びっくりしたりゅうじいは、ちようちんのひを消しました。が、そこは、日ごろのうでじまん。足もとを照らしているのは、金のつるべらしいことはすぐにわかりました。

金のつるべは、はずかしそうに少しゆれました。じつと見上げていたりゅうじいは、この金のつるべが、あのおばれだぬきのように思えてきました。にっこりとうなずくと、りゅうじいは、ゆっくり大やぶをぬけて行きました。

そのうちに金のつるべのことは村中のうわさとなり、だれもが、

「ちようちんいらすずでよいが、うす気味悪くてしかたがない。」
と、いうのでした。

うっすらと霜のおりた朝でした。

りゅうじいのところへ、となりのじいさまが、息をはずませてかけこんできました。

「ゆうべのことや。うらの若い衆が、『おれが正体を見てやる。』と、大やぶへ行ってのう。あのむくの木の下までくると、やつぱり、ほんやり明るうなつて、ほんとに美しいつたら、美しいつるべが下がってきたそう。若い衆は見れば見るほど、おのれの宝にしくなり、とうとう、棒で力いっばい金のつるべをたたき落とすと。それからがえらいこつちや。つるべはず

とんと、やさしい音をたて落ちたら、ころころつと金の玉になり、どんどこ、どんどこ坂道をころがって行く。逃がすものかと追いかけてつかまえたつと思つたら、するりと手からぬけて、ドボンと川の中へ落ちた。そうしたらどうじゃ。きれいな五色の光が水の中にぱつと広がり、すつと消えてしまったと。

あとはいくら待ってももとのまっ暗け。となりの若い衆はついさつき、そりやあ青い顔をしてもどつて来たわ。」

この話を目をつむり口をむすんで聞いていたりゅうじいは、

「むごいことを……。」

と、いったきり、いつまでも動きませんでした。

それからのりゅうじいは、だれにあつてもいいうのでした。

「もう一べん、おばれだぬきの声が聞きたいのう。おばれだぬきの声を聞いたら、ちゃつと、わしに知らせてくりよよ。」